

(資料)

陳書良・潘沅汶著 《中国商業文学發展芻論》 翻訳

— “商業文学” の提唱を巡って／中国語文教学の周辺 —

甲 斐 勝 二*

“商業文学” の提唱を巡って

ここに翻訳し紹介する《中国商業文学發展芻論》は、中国湖南の陳書良氏の著書《風雨書窓 藝文考槃》（海南出版社 2003）に掲載された文章のうち的一篇である。陳書良氏は、長く湖南省社会科学院文学所に勤務、所長を経て、現在は湖南商学院の教授である。昨秋佐賀大学に客員教授として招かれ、訳者も陳氏と共に太宰府天満宮とその近辺にできたばかりの九州博物館参観する機会を得た。湖南社会科学院の陳氏とは、大学院時代論文のやりとりをしたことがあったばかりで、お会いしたことはなかったが、訳者が研究の対象としている《文心雕龍》や詞の研究者として高名な学者劉永濟氏の孫に当たる先生だと云うことは知っていた。今回お会いする機会を得て、父君の早逝により祖父である劉永濟氏から幼児より直接指導を受けていたことを知った。西洋的な知識に基づく学校教育が普及した今、文字から音韻・校勘にいたる曾ての伝統的な古典的教育を受けた最後の学者として陳書良氏が評されるゆえんである。共著者の潘沅汶氏も共に湖南商学院の所属である。

その陳書良氏が今研究対象に取り上げようとしているテーマが、ここに訳出する「商業文学」の問題である。訳文中に指摘されるように、中国では、商業は伝統的に軽んじられてきたし、商売で主要な役割を果たすお金については、所謂高級な人材が好んで話題にするものではなかった。「お金」と口にするのも汚らわしいと思われたこともあったのである。おそらくお金とは別の関係に基づく家族関係のアナロジーが成立させる信義の関係の

* 福岡大学人文学部教授

中で生きて行く官僚的立場の文化人にとっては、つまり中国の曾ての知識人の多くにとっては、お金というものは魔物のようにも見えたのだろう。それによって、信義関係のないものでも動かすことができるからである。また、仲買人などは実際の物品を作っているわけではないから、利ぎやを稼ぐ手段がずるがしこさと見えること、本文に記されたとおりでだろう。

けれども、文明の発達に従って都市が発達し、農村から切り離された都市生活者が糧を得て生きていこうと思えば、たとえ文化人や文人でもお金を利用するしかない。筆で耕しても現実に食しうる作物は実らないからである。従って、都市生活者は必然的に何らかの形でお金を手に入れる活動に関わらねばならなくなる。お金を利用して成り立つ生活が始まれば、そのお金を動かす活動にも正当性が与えられるようになってくるし、また、お金を手に入れるさまざまな方法も生み出されることになった。その結果、実際には物品を作り出さずとも、株や投資という経済活動に関わることで、大金を集めることも可能になっているのは昨今のメディアが競って伝えるところである。

文学史を商業の視点で考えてみること、これはとても現代的な問題提起だと思う。今や如何にお金を集めるか、それをなし得ることが人生の勝利者のように語られる事すらもあるからだ。人間の命すらも、交通事故や各種の裁判で示されるように「この年齢で死ねばおいくら」とお金でバランスを取りかねない時代である。かかる時代への移行を文学がいかように写してきたのか、それは思想史を語る上でも意味があると思う。なぜならば、お金は欲望の解放と対応しており、お金の限りない集積が目指されるとき、その金による欲望の限りない解放もまた目指されかねないからである。そのときには、お金の集積効果を最大に上げるために、さまざまなものが犠牲になるだろう。とはいえ人間は多分全ての欲望を解放するわけにはいかない。もちろん私はそれを証明できない。しかしながら、多くの人もまたそう信じているのではあるまいか。そうだとすれば、どのあたりでその欲望と折り合いをつけるか、そう言った問題も商業を扱った文学の中には示されてくるにちがいない。

訊したこの論文中には、以下のような言葉が記され、その文学史の目的が記されている。

《中国商業文学發展史》^{*1}を書くその目的は、中国商業文学の發展の歷程を述べ、中国商業文学の名篇佳作を論評し、中国商業文学の変遷の法則を検討して、中国商業文学の進んで行く道を示すことにある。

また、そこで取り扱う内容については次のように記されている。

商業活動に関わる文学作品や典籍なら全て商業文学と呼ぶうらというもので、その中には主に以下の領域が含まれている。

- (1) 商業都市、貿易活動、商人の形象を描く詩文作品。
- (2) 文人と商業界の交流、相互の影響を映し出す文章。
- (3) 商品販売と深く関係し、商業經濟のために力を發揮する各種体裁の文学表現形式。
- (4) 文人の商業經濟思想を記した典籍。

これを見たところ、「商業に関わる文学」と言うおおらかなくりに提唱するに留まる。聴くところでは、2005年の湖南商学院にて第一回中国商業文学研討会が開かれ、その領域の検討も行われたとのことだが、まだ始まったばかりである。今後継続されて行くに連れて、文学と商業の関係として捉えるばかりでなく、商業や經濟とそれを支える人間存在や社会関係にまで立ち入って、さらに深みのあるテーマを限った研究も進められてゆくはずだ。文中近年の情況を論じて「文学は国家が打ち立てようとしている發展という大建築物を支える精神的支柱の一つとなった」とあるのであれば、その發展に導かしめるような文学理論や批評もその中から検討されて行かねばならない。そこから文学が追いかけてきた人間というものの新たな理解も示されるはずだ^{*2}。今後の商業文学の發展を導く効果も

^{*1} 《中国商業文学發展概論》(2004 甘肅文化出版社) 周柳燕等著のこと。この芻論はそもそもこの書の緒論として書かれたもの。周柳燕教授は、湖南商学院中文系副主任、湖南省商業文学研究会副会長。

^{*2} 日本の場合、商業文学史といったものは寡聞にして知らない。しかしながら、古典落語の「百川」という作品は、当時あった「百川」という料亭の宣伝のために作られたと聞くので、商業と縁のないものばかりでもないのだろう（《古典落語（続）》講談社学術文庫）。管見の及ぶところでは今村仁司氏が、貨幣の人間世界における位置づけを死と結びつけた媒介として考えようとし、貨幣の作用に注目した文学理解を進めて、「貨幣文学」の概念を提出している（《貨幣とは何んだらうか》今村仁司 筑摩新書）。訳文に提唱される商業文学とは切り込み方が全く異なるのだが、これも貨幣と切り離せない商業を巡る研究發展の可能性の一つとして含めることはできないだろうか。

上げられるかもしれない。

ついでに述べておけば、商業を巡る文学研究の領域として、中国本土はもちろんのこと、今後は華文学の領域も十分対象にしようとする事を指摘しておこう。授業で学生とブルネイやフィリピン作家の小品、所謂華文学作品を読んだことがあるが、そこには間接的にも商業を背景にした話がずいぶん出てきて、各作家の生活における商工業との関わりが見えて面白い。考えてみれば、華僑や華人社会で書かれ読まれる華文学を支える読者は、圧倒的に海外で暮らす華僑や華人であって、彼らの仕事は農業ではなくほとんど商工業である。これは当然だろう。代々の家産のない華僑や華人の生活を成り立たせるものが商工業である以上、華文学は商業文学として考えるに一番近いところにあるのではないか。訳文中には、所謂華文学に属す香港の財經小説が挙げられているが、それほどまでに直接的ではなくとも、華文作家の作品には深く生活の中に根付いた商業との関わりが至るところで顕れている。各地の華人社会が生み出す文学は、より一層商業生活との関係が示されるように思う。

中国本土も近年は拝金主義が批判される時代になった。さまざまな経済活動が進められる中、「商業」という視点で文学史を構成してみようとするこの試みが今後どのように展開するのか、そこからどのような規律が導き出され、その将来がいかようなものと考えられているのか新しい研究領域を今後どのように充実させて行くのか、今後の展開がどうなるのか、それは興味深い問題だ。

なお、翻訳に当たって、そこに挙げられる作品や作者についての情報は、その時代を訳文の中に加える程度に留めている。また、しばしば“ ”で示される引用文が出てくるのだが全てを確認できたわけではない。明らかな出典が確認できたものは注釈に示したものの、注釈をつけられないものも多かった。近年新しく主張されたばかりの“商業文学”というものの紹介がこの翻訳の主な目的だとして、お許しを願うことにする。また《 》は書名、篇名を指す。《A・B》と並べば、《書名・篇名》となる。書名は『』篇名は「 」とするよりも使いやすいのでこちらを使った。

末筆になるが、翻訳を許可された陳書良先生に感謝したい。

中国商業文学發展芻論*1

—

中国文学は長い流れの歴史を持ち、数千年の發展過程の中、光り輝く成果を手に入れている。しかしながら、光あふれる文学の長い河を検討すると、次のような現実に気づかされる。それは、学会では長期の間、ある地域の文学や、ある領域の文学の研究にはマニアチックになりながら、残念なことに商業文学についてはおろそかにされていたことだ。しかし、歴史が商業文学の領域に残したものは、決して沙漠のようなものではない。先ず先秦の時代、「氓之蚩蚩,抱布貿絲（どこから来たかここにこと、布を小脇に糸をかえ）」（《詩經・衛風》）*2ながら女性を弄んで棄てる小商人から、辛い行商に務める漢代の孤児（《孤児行》）、商売の神様でもあり豊かな情感も持っていた清の胡雪岩（《胡雪岩》）に至るまで、商人や商人の行為は「別類」と見なされ、文人墨客の鋭い眼差しをずっと受け続けていたのである、たとえ「青目」を以てであろうと、「白眼」を以てであろうと*3。次に、商品經濟の發達は都市に繁栄をもたらし、人の往来にぎやかな都市は郊外の自然の景色と大いに趣を異にし、文人達の豪快な情感を導いた。後漢の張衡の《西京賦》では美しく豊かな修辭表現で、「沢山の商人達」「美しい物品が集まり、さまざまな動物が集められる」という豊かな富が繰り広げられ、北宋の柳永の《觀海潮》では新鮮な用語で「中国東南部の形勝要害の地、三呉地方の都会、杭州の都の繁栄は昔から」という盛況ぶりを描いている*4。この他に、金や銀の交易の中、算盤の珠の躍動する響きの中、数々の恋愛

*1 原注① この文章は潘沅汶との合作である。

*2 原注②《毛傳》は「氓」を「民」と解釈し、《韓詩》は「氓」を「美貌」とする。《孟子・公孫丑上》に：「賢者を尊び、能力者を使い、俊傑がしかるべき位置にいる、そうすれば天下の士人はみな歎び、その朝廷に出仕使用と願うだろう。市場では、店舗税をとっても物品に税をかけねば、天下の商人はその市場に税金を喜んで納めるだろう、……住居に力役と土地税は取らなければ、天下の民は喜んで氓となるだろう」（解釈は朝日新聞社・中国古典選8《孟子》金谷治による）とある。楊柏峻はこれを、「概して別の場所から移ってくる民を氓という、故にその字は、民と亡によってつくられる」と考える。楊説に従う。《衛風・氓》の氓は、「移ってきた民」と解すれば、その「布を抱きて糸に買える」という言葉から、小商いの商人に違いない。（訳注：《詩經》の訳は目加田誠著作集第二巻による。以下同じ。）

*3 《詩經・衛風》：《氓》の詩 《孤児行》：漢代の樂府。作者不明。《胡雪岩》：胡雪岩は清代の商人の名。当時の商人胡雪岩の活動を描いた《胡雪岩外伝》が知られるが、胡雪岩についてはテレビなどでも最近番組化されている。

*4 柳永の《觀海潮》：一般には《望海潮》。

物語も導かれてきた。「卓文君が酒屋に立ち、司馬相如が酒を売る」^{*1}、夫人が歌い旦那が従って、互いに心を照らし合うこの姿は、長い間文人達がうらやましがったものだ、また「流す涙にぬれそぼる、この事務官の青い衿」^{*2}、この商家の夫人の琵琶による夜の語りは、大詩人の白居易をすすり泣かせ、夜も眠れないようにさせているが、もっとも見事なのは誠実で真面目な油売りの秦重が、美貌の花魁の素晴らしい心を勝ち得たものだろう……^{*3}、これを要するに、中国商業文学の存在が争えない事実であるということ、これは認めねばならない。

しかしながら、「中国商業文学」という概念、及びそこから生まれてくるそれに対する認識・分析・解釈と研究となると、その存在に対して大きく劣るものになってしまうのだ。

指摘しておかねばならないのは、春秋戦国時代は中国思想史の上で初めて大きく変化した時期であって、百家争鳴の思想界では、この時期に出現した新しい事物・新しい変化を、はばかりことない議論の中に反映していること、しかも、これらの論戦の中で形成された観点は、長期にわたって新事物の発展に影響を与えていることである。商業交易もまた例外ではない。当時、孔子は「公平でない」・「食料が切れても取り乱さない」事を崇拝し、墨子は「固本以用財」を主張し、孟子は「物品の価値の均一成らざること」を強調し、莊子は「無欲であること」を宣伝し、荀子は「出費を節約して人々を豊かにする」を提唱して^{*4}、皆鋭い眼差しを新興の商業交易に向け、その叡智ある頭脳で商業交易の行方に検討を行い、しかも自分の巨大な影響力によってそれに規則を加えようと企てている。しかしながら、秦漢の中国統一に従って、前漢封建王朝の儒家独尊と他の百家の思想の排除に従って、儒家思想が次第に中国の伝統文化の核心を形成して行く。長い封建社会の中で、人々は普遍的に義を重んじ利を軽んじる価値観を崇拝するのだが、この義を重んじ利を軽んじる行為の内実と商業経済がもつ利益追求の本質は相反するものだから、商人の軽視と商品経営を蔑視する伝統的観念の形成を導く事になる。加えて歴代の封建政府はほとんど皆農

^{*1} 前漢の辞賦作家、司馬相如が名家の令嬢卓文君と駆け落ちし、金に困って酒屋をやった有名な話をふまえる。しばしば故事として引用される。

^{*2} 白居易の《琵琶行》の一節。

^{*3} 油売りの秦重：明代の小説集《醒世恒言》に掲載される話。

^{*4} 孔子：《論語・季子》の「有国家者不患寡而患不均」及び《論語・衛靈公》の「君子固窮」の部分踏まえる。

墨子：《墨子・七患》の「先民以時生財、固本而用財、則財足。故雖上世之聖王、豈能使五穀常収而旱水至哉。然而無凍飢之民者何也、其力時急、而自養佚也」を踏まえる。

孟子：《孟子・滕文公篇上》の「夫物之不齊、物之情也」を踏まえる。

莊子：《莊子・馬蹄》の「同乎無欲是謂素朴、素朴而民性得矣」を踏まえる。

荀子：《荀子・富国》の「足国之道、節用裕民而藏其余」を踏まえる。

業を重んじ商業を軽んじていて、商人といえればみな狡賢い者、「最低の仕事でぶらぶらして暮らす民」と非難され、商業もまた「詐欺の仕事」^{*1}と見なされたのだ。

このような観念の下、中国商業文学が歴史的に冷遇を受けるのは当然だった。ここで我々が提出しているのは「中国商業文学」であって、決してその中のある種の名作ではない。例えば漢の楽府《孤児行》・唐の白居易の《売炭翁》等、このテーマが全体的にみれば否定されても、それぞれが個別の各篇としての評価を得ること、それに問題はない。文学史の角度から考えて、我々が注意しなければならないのは、歴代に誉め称えられた辺塞文学・田園文学と比較すれば、中国商業文学の存在は無視されているように見えることなのだ。歴史的に文学を分類するときこれを分野として独立させた書籍はなく、当然ながら深く研究したものなどもやはり指摘できない。しかしながら、実際のところ、中国文学の伝統とは、「文章はある時代を表現する為に著されるべきであり、詩歌はある事柄を歌うために作られるべきである」^{*2}に他ならず、文学という手段は現実を反映するものだった。中国の商業交易は時代と共に進み、歴代の文人は夙に商業と文学とを緊密に結びつけていたのだ。現在の高度に発達した商業経済社会の中で、我々は商業文学の存在を黙殺して、その研究を拒む理由はない。そこで、我々は不明を恐れずに、商業文学の概念を提出したのである^{*3}。存在が確定しても、それによってその概念世界が明快になるわけではない。では、商業文学とは如何なるものなのか。我々が考えるのは、商業活動に関わる文学作品や典籍なら全て商業文学と呼ぶうるというもので、その中には主に以下の領域が含まれている。

- (1) 商業都市、貿易活動、商人の形象を描く詩文作品。
- (2) 文人と商業界の交流、相互の影響を映し出す文章。
- (3) 商品販売と深く関係し、商業経済のために力を発揮する各種体裁の文学表現形式。
- (4) 文人の商業経済思想を記した典籍。

中国商業文学研究の任務は、中国商業文学の変化展開の過程を整理し描写して、その発展規律を検討し、その進む将来の方向を示すことにあるのだ。

^{*1}「最低の仕事でぶらぶらして暮らす民」は漢の賈誼《論積貯疏》中の「今毆民而婦之農、皆著於本、使天下各食其力、末技游食之民転而南晦、則蓄積足而人樂其所矣」、「詐欺の仕事」は漢の《塩鉄論・復古》中の「遠去郷里、棄墳墓、依倚大家聚深山窮沢之中、為姦偽之業、遂朋党之權、其輕为非亦大也」を踏まえる。

^{*2}白居易《与元九書》の中の「自登朝来、年齒漸長、閱事漸多、每與人言、多詢時務、每讀書史、多求理道、始知文章合為時而著、歌詩合為事而作」に基づく表現。

^{*3}原注① これ以前、多くの論著・論文で古代文学の作品中の商人の形象が描かれており、既に「中国古代文学作品中の経済問題」に論究する専著もある。（沈瑞民《中国古代文学作品経済問題》西南財經版）

二

マルクス主義の考えるところによれば、経済が基礎であり、文化はその上に立つ上層建築であって、経済が文化を決定づけ、文化は経済に反作用してゆくという。中国商業経済の発展を顧みるに、長く屈折した過程、つまり、先秦と前漢時代での発芽成長、後漢の末年より魏晋南北朝の停滞、隋唐から宋元の繁栄、明清の加速的発展、近現代での突然の変化、及び新時期の猛烈な進展、を経てきた。その中には多くの商業経済思想家が現れている。賈誼（漢）・司馬遷（漢）・陸贄（唐）・王夫之（明末清初）・鄭觀応（清末民初）・龔自珍（清末民初）等、彼らの商業の功績に対する認識は次第に豊かになり、関係する商業経営の多くの経験と思想を整理しまとめて、商業経済の発展を後押しし、都市の繁栄を導いた。同時に、商業経済の発展は文学創作にも豊かな創作の泉をもたらしたのである。文学と商業とは絶えざる葛藤・滲透・相互影響を経て、中国文学の重要な分野—商業文学を出現させたのだ。中華民族幾千年の商業経済生活に根付いたこの文学作品は、中国の伝統文化と商業との交流と融合を示すばかりでなく、中国文学の内容をさらに一層豊かにしたのである。

中国商業文学を歴史的に見るならば、我々は、それが中国の商業交易とほとんど歩みを同じくして生まれ発展している事を発見する。

（一）中国商業文学の萌芽期：この時期は、歴史上先秦から両漢の時期を包括する。春秋時代、文学は社会経済生活を意識的に映し出すものであった。例えば《詩経》には《衛風・氓》の女性を弄んで棄てる行商人への諷刺、《魏風・碩鼠》の映し出す奴隷主の賦税改革^{*1}などがあり、ある意味においては《詩経》に描き出されるのは奴隷社会の経済発展史だと言っているのである。春秋の末期になると、中原地区は経済的に繁栄し、村里を歩き回る行商人ばかりではなく、さらに長距離の商業活動も現れてくる。正にかかる歴史舞台にこそ、《左伝》僖公 33 年の「鄭の商人弦高が智力によって秦の軍隊を退かせる」^{*2}とい

^{*1} 《魏風・碩鼠》：「大ねずみおおねずみ、わが黍を食むことなかれ、三年が間仕えしに、われをあわれむこともなし、今こそ汝を去りゆきて、楽しき土地に移りなむ、楽土よ楽土ああそこに、生くべき場所もあるべきか……」この詩は、周王の東遷以後、奴隷制と農奴制が次第に崩れ、新興地主が出現し、その新興地主が土地を小作農に貸して重い租税を取る様を歌うという（《詩経今注》上海古籍出版社 1980 による）。

^{*2} 《左伝》僖公 33 年の「鄭の商人弦高が智力によって秦の軍隊を退かせる」：秦国が鄭国を奇襲しようと軍を出した。鄭国の商人弦高は周国まで取引に行く途中これにてあうや、鄭に知らせ備えを堅くさせ、秦の軍隊に攻撃を諦めさせた話。原文 32 年は誤植。

う誠に見事な一文が出現するのである。

秦の始皇帝が中国を統一すると、封建政権を堅固にするために、焚書坑儒などの残酷な鎮圧政策を採ったので、知識人は冬のキリギリスのように黙ってしまった。この時には、李斯（秦）の《諫逐客書》の中で、「秦では産出されない多くの立派な物品がある」という現実から出発して対外開放を提案し積極的に「四方」の優れた物産を輸入して国を豊かにし人々のレベルを引き上げるといふ経済主張があるばかりである。と同時に、《諫逐客書》は文学の視点から見れば、丁寧かつびのびとした歴史に残る名文でもあった。前漢の初めは「休んで回復する」政策で、経済基礎の建設に力を注ぎ、「文景の治」と呼ばれる安定局面に入った。統治者は比較的合理的な経済政策を系統的に採用し、社会生産を回復し、商業の繁栄を促した。当時は富裕な商人が天下にあまねく、大は「物品を貯え儲けを倍にし」小は「並べた商品の中に座って販売する」^{*1} というように、日々都で活動して、金を手に入れていたのである。司馬遷はその偉大な歴史書《史記》の中で《貨殖列伝》をも独立して立てて、20 数名の大商人のためにその伝記を残し、彼らの経営の道をまとめている。《貨殖列伝》は正真正銘の商業伝記文学にもなっているのだ。商業交易の発展によって、多くの都市は唯に政治軍事センターを改め、「東では齊や魯と交易し、南は梁や楚と交易する」^{*2} といった商業の大都市になったのだ。都市の繁栄は、漢代の主流文学である辞賦の創作に一つの新しい題材を提供した。それが京都の賦である。これもまた商業文学の重要な表現形態である。その中で堂々と大きなものは、楊雄（前漢）の《蜀都賦》・傅毅（後漢）の《洛都賦》・崔駰（後漢）の《歴都賦》などがあるが、最も影響が大きなものならば班固（前漢）の《西都賦》と張衡（後漢）の《西京賦》を推さねばならない。張衡の《西京賦》の中では、市場に並ぶ商品の目に鮮やかなさま、山のように積まれたありさま、多くの人々の往来、頻繁に交換される情況、大忙しでござったがえす風景などが描かれて、「各地の大きな都の商人達は、みなここにやって来る、物品を大量に載せた車が次々とやって来て、ぎしぎしと車の音が響く」^{*3} の語が、漢代の商業都市の驚くべき様子

^{*1} 漢の晁錯《論貴粟疏》にある「…於是有売田宅、鬻子孫以償債者矣。而大商賈者積貯倍息、小者坐列販売、操其奇贏、日遊都市、乘上之急所売必倍…」に基づく表現。原文「信息」は誤植。

^{*2} 《史記・貨殖列伝》に「洛陽東賈齊魯、南賈梁楚」として、洛陽の情況を表現した文をふまえる。

^{*3} 《文選・西京賦》：「五都貨殖、既遷既引、商旅聯榻、隱隱展展」をふまえる。

を再現している。

これがその一面だが、別の一面では、前漢の農業重視商業抑制政策のために、「商人には絹の着物を着たり、車にのる事を認めず、租税を重くして彼らを辛い目に遭わせた」（《史記・平準書》）とある。多くの商売人、とりわけ行商人については、その運命は誠に苦しいものであった。漢の楽府の《孤兒行》では、兄やその嫁のいじめにあった孤兒の涙ながらの訴え、「兄や兄嫁は私を行商にだし、南は九江に、東は齊と魯にゆく。年の暮れに帰ってきても、辛いなどの愚痴もこぼせない」とある。この歌は第一人称で語られ続けて、聞く人に涙を誘い、しみじみとした思いになる。

（二）中国商業文学の停滞期：魏晋南北朝は、長期にわたって地域が分裂しており、天災や人材がしきりに起って、社会経済はことごとく破壊されてしまった。中でも、後漢の末に盛んになった門閥制度は西晋に引き継がれ、一層その激しさを増し、「公門には公あり、卿門には卿あり」（《晋書・文苑・王沈伝》）といった不合理な現象を創りだし、「高い家柄の立派な一族には、代々の榮譽を持ち、庶民や下級の人々は、進む道がこれっぽちもない」（¹ 趙翼（清）《二十二史札記》）という巨大な不公平をも創りだしたのだった。西晋の崩壊により多くの一族が長江を渡ったが、西晋の士族が持っていた全ての墮落性を山紫水明な長江流域にもたらすことになる。堅牢頑固な門閥制度の下、商人がその下に見られたのは当然である。この時期の文学・芸術及び学術は、燦爛と輝くものだが、商業文学の発展となると停滞の様子を見せる。内容であろうと形式であろうと、先秦兩漢の時代に比べてそれほど大きな進展はなかった。西晋の左思の《三都賦》、北朝時代の楊銜之の《洛陽伽藍記》などが比較的有名である。しかし、干宝（晋）《搜神記》・劉義慶（劉宋）《世説新語》等の小説となると、社会経済の現状・財産移動の情况及び経済を巡って展開する矛盾と闘争について、かなり鋭い描写や表示がなされている。

（三）中国商業文学の初歩的発展期：この時期には歴史上の隋唐宋元時代が含まれる。西暦 581 年、楊堅が陳朝を滅ぼす、その後貨幣の統一と南北大運河の開削は、商業経済の復活に良好な条件を生み出した。唐朝の李世民が即位すると、民にめぐみを与え商人に憐れみを加える政策を実施し、封建的な統治を確乎なものにしようとした。政治の統一と安定、農業生産の回復と発展は、中国封建社会の商業経済に先秦・兩漢を継承する第二の盛

¹ 《二十二史札記・九品中正》に：「真所謂、上品無寒門、下品無世族、高門華閥有世及之榮、庶人寒人無寸進路、選舉之弊、至此而極。」

況を出現させた。少なからぬ俊才の士が書籍を投げ捨てて、「牛に引かせ・馬に引かせて、四方をまわる」*1 ことに甘んじるものすらいたのである。人々は司馬遷の「貧乏から豊かになろうとすると、農民は技術者ほどではなく、技術者は商人ほどではない」及び「豊かになってこそ礼儀というものが分かる」という思想に以前にも増して賛成し崇拜したのである。かかる思想観念の変化は、商業經濟の發展と商業の社会における地位の向上という事実が人々のイデオロギー上に反映したものであって、人々は素早く金儲けができる商業を選び自分の職業としたのである。姚合の《莊居野行》、張籍の《賈客樂》、元稹の《估客樂》等の詩作は当時の社会の「誰も彼もがやみくもに向かって行く」商売ブームを忠実に反映するものである。隋唐時代の商業經濟の盛んな様をしめすその第2は、市場貿易の繁栄だ。《長安志》（宋・敏求）の記載では、唐朝長安の東西二つの市場の商業は繁栄し、「東市の中は貨物が220列にも並び、周囲のお屋敷には、あちらこちらの珍しい物品が皆積まれていた」という。一方この時の市場制度にも根本的な変化が生まれ、古代の「交易が終われば帰って行く」ような「日中に市が立つ」*2 というものではなくなくて、現代の都市によく似た商業区域ができあがり、正規の都市の市場以外に、中唐では「草市」「夜市」及び「宮市」*3 も出現している。晩唐の詩人王建の《汴洛即事》、杜牧の《上李太尉論賦》*4 は共に農村商業に対する描写となっているが、白居易は宮市をその目で見て後、現代にまで伝わる《売炭翁》を書き下ろしたのである。隋唐時代の商業經濟の繁栄の指標の第三は、中国と西方の貿易が活発であったこと、中でも「シルクロード」は、友好の道に留まらず、貿易の道として一層重要で、裴矩の《西域図記》、張籍の《涼州詞》は共にシルクロードに往来する貿易を生き生きと描いている。さらに、黄砂を舞い上げ駱駝の音が響く隊商の群れの中に、胡商—外国商人の姿をも見ることが出来る。例え

*1 本文「販牛駱馬、以周四方」、《國語・齊語》の「今夫商、群萃而州処、察其四時、而監其郷之資、以知其市賈、負・任・担・荷、服牛駱馬、以周四方、以其所有、易其所無、市賤鬻貴、旦暮從事于此」をふまえた表現なので、販は服の誤植、駱は駱の意で解釈。

*2 この部分、《易・繫辭下》及び《漢書・食貨志》にみえる「日中為市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所」をふまえた表現。太古の時代の市場の成立についての記録。

*3 「草市」：町の城郭の外で開かれる市場。「夜市」：夜間に行われる市場。「宮市」：宦官が主導する市場。いずれも唐代の文献に見える。

*4 本文《汴洛即事》に作るがおそらく《汴路即事》の誤植。杜牧《樊川文集》に《上李太尉論賦》は未見。《上李大尉論江賊書》（《樊川文集卷11》）の誤りか。

ば杜甫の《灩澦》*1に「商胡離別して揚州に下り、憶いおこす西樓故駅樓に上るを」というようなものだ。

隋唐という良好な基礎の存在及び両宋自身の発展によって、宋代の商業は封建社会商業の比較的成熟した繁栄の段階に到達し、商業経済に長足の進歩をし、都市はより一層繁栄した。これら一切のものはこの時代の商業文学の中にふさわし例証を見つけることができる。柳永・歐陽修・陸游・范成大・姜夔等の詩詞或いは市街地の歓楽の記述、或いは昔日の華やかさの追憶などは、商業交易が大きく発展して文学に無限の活力を注ぎ込んだことをしめすものだ。孟元老の《東京夢華録》はくっきりして優美な解説の文章となっており、同時代の絵画の傑作《清明上河図》と互いに輝いている。呉自牧の《夢梁録》、《武林旧事》は私たちに杭州の立派さと豊かさを楽しませてくれる。中でも私たちがもっとも驚くのは、北宋時代には中国で最も早い商標の「白兔」が出現してもいたことだ。白兔の図案の下には、経営者の自家製品に対する工夫を凝らした宣伝文句*2がある。これは広告文学のひな形といえるものだろう。この商標を印刷した銅板は、現在中国歴史博物館に並べられていて、それは当時の経済の繁栄を映し出すと共に、文学が経済のために果たす能力もまた明らかにするものだ。

元の統治者は商業を重視して、「元は功利によって天下を導き」、*3商人は以上に活気づき、工業商業の発展もまた、以前からの及び新興の重要な都市に空前の繁栄を導き、通俗文学の大発展をもたらした。中でも、南北が統一されて後、東南沿海の都市経済の迅速な立ち上がりは、北方の雑劇を南へと導いたばかりではなく、しかも、この北方の文学の形態は瞬間に全国の都市で大いに熱演されるようになり、商人の社会活動及び生活思想を映し出す作品を生み出した。例えば、無名氏の《来生債》、秦簡夫の《東堂老》等の雑劇によって、元曲と元雑劇は中国文学史上極めて豊かな経済生活を含む様式となったのである。

力強く吹く商業重視の風に染められながら、元代の詩人も金銀の溢れる商業地域に真剣な眼差しを向け、自覚的に都市生活と関わった。例えば薩都刺・顧瑛・王冕等は、その詩

*1 杜甫の《灩澦》：この題未見、《分類集注杜工部詩二五卷》には《解悶》の名で収録。

*2 宣伝文句は済南劉家功夫針舗のもので、銅板印刷されたもの、文章は「収買上等鋼条、造功夫細針、不誤宅院使用、客転与販、別有加饒、請記白」とある。

*3 本文「元以功利誘天下」、は《遜志齋集》に見える言葉「吾郷之士、多秀而有文、比三百載間其俗凡三變……至元以功利誘天下」をふまえる。

は世俗的な生活の情緒に富み、都市の繁栄を謳歌している。中でも、儒者で大商人を兼ねた顧瑛は《三二年来、商旅難行、畏途多棘、政以為嘆、徐君憲以〈雪景盤車図〉求題。觀之風雪、不能無戚然也、遂為之賦云》^{*1}の一詩は、商人の身分にて商人の生活を描写し、元代の商業詩文の佳作として堪えうるものだ。これを要するにこれまでの二つの時期に比べると、隋唐宋元時代の商業文学の作品の数は増え、内容は一層広汎になり、明代清代に商業文学が成熟するためにしっかりとした基礎を固めたのであった。

（四）中国商業文学の成熟期。この時期は明代及び清代の前期を指す。この時期には、国内の工業商業は成長をみせ、商品の生産と商品交換の規模は拡大し、国内市場は一層盛んになった。中でも、東南沿海では開発がすすみ迅速に発展して、新しい生産関係である資本主義が芽を出し始めた。商業資本は、中国封建社会において長期にわたって継続した発展して、この時期には既に大量の資本を擁する商人グループ、例えば徽商・晋商・洞庭商などが形成され、グループの中の大商人が全国の商業交易を操ったのである。これと同時に、明代の中期から清代の前中期、なお成長中の商人階層の利益を代表する商業思想家丘浚・黄宗羲等の人物が「本を重んじ末を軽んじる。」という伝統思想に対して批判運動を展開した。「工業や商業を末とすることは、その本来の意味を忘れて不当に貶めることである。そもそも工業とはもとより聖王の求めに応じたもので、商業もまたその願いを途より出すものであって、共に本源なのである。^{*2}」（黄宗羲《明夷待訪録》）、「商売は商人の仕事とはいえ、しかし、風俗の奢侈、人情の華実、国用の盈虚は、全てこれによって動いているのだ。」（丘浚《大学衍義補・市糶之令》）^{*3}と述べて、彼らは懸命に商人の社会的位置づけの向上を訴え、商人を軽視する社会風潮を改めようとしている。これらの進歩的な思想は伝統の重農軽工商という主流に抵抗するには力足らずだったけれども、この資本主義の発展への要求を反映する先進的思潮は、暗黒の中に一筋に輝く光線のようにもであった。商業交易によって容易に大もうけできること及び新思潮の影響は、人々の商業への認識を大きく変えることになった。「商人になんの卑しむべきところがあるろう。」伝統的な

^{*1} 題意は「三二年来、交易の旅は辛く、路の困難の心配ばかりし、そのためため息をついてきた。徐君憲が「雪景盤車図」に題詩を書いてくれと求めてきたが、その風雪を見ると、思わずあの辛酸を思い出してしまった、そこで賦して述べた」

^{*2} 《明夷待訪録・財経三》に、「……此古聖王崇本仰来之道、世儒不察、以工商為末、妄議抑之。夫工固聖王之所欲来、商又使其願於途者、蓋皆本也」に基づく。

^{*3} 丘浚《大学衍義補卷 25・市糶之令》に「臣案、肆所陳雖商賈之事、然而風俗之奢儉、人情之華実、国用之盈縮皆於斯焉」とあるに基づく。

「勉強して役人になる」という生活モデルと「役人を重んじ商人を軽んじる」という観念を人々の価値観は乗り越え、実用的で功利的な商業崇拝の精神を示すようになったのだ。明の後期では、「地主から雇い人まで多くのものが金儲けに熱心だった」（黄省曾《呉風録》）。文人士大夫で商業を営むものも日増しに増え、唐甄は「呉の市場で仲買人をやっていた」（《広東新語》）、東林党の中心人物李三才は「交遊における有利さを生かし間に立って利益をねらい、時には千金を手に入れることもあった」^{*1}という。文人士大夫は商売をしても生産方式を変えることはできないけれども、しかし、この風潮は一般に発展して、「君子は天下大道を考え衣食の事などは考えない」^{*2}という信条を実践的には乗り越えてしまい、また認識においても商人に対する見方を改めたのであった。商業の発達と商人の地位の向上は、この時期の商業文学に質的な変化をもたらしている。

先ず、これまで大雅の堂に上らずといわれた商人が、一躍文学作品の主役になった。明代の後期士人と商人は相互に入り交じり、この時期に商人の士大夫という傾向が生れた。一方士大夫は前王朝に比べて一層有利な特権を持っていて、ひとたび学校に入学すれば一生木々端役人などになることはなく、法を犯しても簡単には罰せられなかった。多くの商人およびその子弟は財産を積み立てて後、一生懸命勉強して科挙に合格するものが日増しに増えてきた。彼らは、「士大夫と交わりを飲んで結びそれを出世の手だてだと考えた」り、商業交易業務のために士大夫と交遊した。風雅の世界を手の内におくこと、これが商人たちの流行で、この流行は明代の生活の中に十分に反映されて、その中に商人を含めた市民を描く作品も明らかに増大し、また明清商業文学の一大特徴ともなっている。たとえば蘭陵笑笑生の長編小説《金瓶梅詩話》、瞿佑の文言短編《剪灯新話》の中の《聯芳記》、蔡羽の《遼陽海神伝》、宋懋澄《九籀別集》に収める《珠衫》等がそうである。中でも馮夢龍の「三言」及び凌濛初の「二拍」^{*3}といったこれらの作品が描きだす似たような商人のありさまは、勝手に悪事をはたらき、楽しみ放題の成金式の豪商西門慶は云うに及ばず（《金瓶梅》に登場）、道義も儲けも共に重んじる文若虚（《初刻拍案驚奇》に登場）であっても、共にこれまでは大雅の堂に登ることなかった位置の者から一躍小説の中の主役となった者だ。

*1 この部分未詳。

*2 本文「君子謀道不謀食」、《論語・衛公》の中の言葉に基づく。

*3 「三言」は《喻生明言》《古今小説》《警世通言》の総称、「二拍」は《初刻拍案驚奇》《二刻拍案驚奇》の総称。

その次として、商人の形象が全面的に上下逆になってしまったこと。古代の伝統觀念の中では、農業經濟の基礎の上に打ち立てられる政治秩序に対して浸食作用を強く持っていたので、朝野の議論は一貫して重農抑商を提唱し、それが文学に反映したため、商人も批判されたり嘲られたりしたものである。明代以前の文学作品の中では、彼ら商人は金儲けのために別離を軽んじ、富裕になるために仁愛の心を棄て、スケールが小さく細かなことばかり気にしている。ところが、明清の小説の中の主人公となると作者の讃える対象となる者がかなり多くなる。彼らは不屈の精神で、さまざまな試みを企て（《拍案驚奇》巻八の中の蘇州王先生）、非常に誠実で人情も利益も共に重んじ（《醒世恒言》巻三中の秦重）、時には文化的な仕事に手を出し、政治闘争に参加もする（例えば如方域《馬伶伝》中の新安の商人）、これらの人物の形象は誠に新鮮で、中国の芸術作品中の歴代人物史を極めて豊かにするものである。

（五）中国商業文学の安定發展期：この時期は1840年から1949年新民主主義革命が勝利するまでの時期にまたがっている。アヘン戦争の砲火が鎖国していた封建帝国の大門を打ち開き、外国資本の侵略と、洋務派運動が中国農村の自然經濟の破壊を加速し、同時に中国資本主義經濟の成長と發展を刺激した。中国の国營の商工業及び民間の商工業は日ましに盛んになり、都市には奇形な繁榮が現れ、商業は國民經濟の重要な一部分として正当に独立し、商品の生産、流通の範囲と程度は以前の如何なる時期に比べても一層大きな發展を遂げたのだ。社会經濟の激しい変動は、商業經濟思想に波乱をよぶ。曾國藩・郭嵩燾・王韜・鄭觀應などの多くの「經世」学派の人物が時宜に応じて登場し、「商本論」「工を勧め商を重んじる論」「商戰論」「商務を振興する論」等の進歩的な觀點を提出した。一方、後期に立ち上がる資産階級改良派人物の康有為・梁啓超・譚嗣同等になると、對外通商貿易・外国資本主義商品の輸出などの問題を単純に見るのではなく、民族商工業經濟を振興することが、貿易競争の行き詰まりを打開する主要な事柄だと強調していたが、これは孫中山・廖仲愷・章太炎などを代表とする資産階級民主革命派の商業經濟思想にかなり影響を与えている。

社会と思潮の変化は、文学創作の内容と形式に一定の影響をもたらしたし、新しい文学の姿と文学の潮流を出現させた。例えば「小説改革論」・「詩界革命」等が示されたのだが、芸術的成果となると決して高くはなかった。商業文学の發展について具体的に言えば、この一時期に最も影響があったのは、「經世」学派・改革派・革命派の著作で、商業經濟の發展に有利な思想觀點が大量に描かれたのである。しかしながら、その文学の成功は、明

代清代に対して言うならば、決して大きな発展があったわけではない。このような情況が維持されたまま、「五四」文学革命になってようやく、驚くような質的な変化が現れることになる。文学革命は、これによって多くの市民が白話文学に対して大いに興味を持ち、文人の創作情熱をかき立てて、中国文学を新しい段階に導いたばかりではなく、しかも文学と商業界の関係をさらに直接的なものにし、商業文学も過去に比べて大きな発展があったのだ。商業文学について言えば、この時期には名作が大量に出現し、大作家が競い合っていた。小説には茅盾の《子夜》・《林屋鋪子》・《蚕》・《霜葉紅似二月花》、張恨水の《啼笑因縁》、老舍の《四世同堂》等がある。話劇では曹禺の《雷雨》・《日出》がある。報告文学には夏衍の《包身工》等がある。これらの作品は、中国の近代民族資本主義商業経済の発展を背景として、細々としていて複雑ながら重大な歴史社会的意義を持つ生活現象を躍動したまた大きなスケールの芸術形式を用いて表現したものである。

(六) 中国商業文学の空前の繁栄期。1949年、新中国の成立以後、とりわけ80年代の初め、我が国は改革開放政策を実行し、社会主義の市場経済の発展に大いに力を入れ、社会の変革は中国社会の構造及び文学芸術に対して広く大きな影響を与えた。多くの伝統的な価値観には大きな変化がおとずれ、商品経済はそれぞれの人々の思想や人生に巨大な影響を生んだのだ。学術博士が商業に携わり、教授が大学をやめて会社に移る、等はよく見かけられる現実となり、文学は国家が打ち立てようとしている発展という大建築物を支える精神的支柱の一つとなった。商業文学の功利性は世の人々の認めるところとなり、斬新な姿を人前に現す機会も増え、内容の豊富さ、作家と作品の多種多様さ、文学形式のさまざまな形など、以前の如何なる時期にも比べられる者ではない。この時期の商業文学を総合すると以下の特徴をあげることができる。

1、商業との関係に一層密着するようになり、直接商品経営にサービスを行うようになった。例えば、中国古代商業文学が商業経済に対するサービスはといえば、多くが「琵琶の陰から顔を覗かせる」^{*1} ようなものであったが、市場経済を背景とする商業文学の場合商品経済に直接サービスする情況が現れている。その中でも、広告文学及び楹聯が企業のために、その形象を打ち立て、その製品を宣伝する事に関しては、他の芸術形式の及びも着かない所である。生産者は自分の製品が最もよく売れるようにと、その広告は文学性と

*1 本文は「猶抱琵琶半遮面」、白居易《琵琶行》に登場する琵琶の弾き手が恥ずかしげに現れる部分に基づく表現。

美学的効果が追求され、散文・詩歌・漫才・講談・戯曲等各種の形式を採用し、最も人の心を刺激するような文学言語で表現を作り上げ、ついには市場への大きな魅力を生み出している。楹聯は五代の後蜀に生まれたと伝えられ、そもそも伝統的な文学形式で、詩詞の形式の変化したもので、一般に春聯・賀聯・挽聯・居室聯・名勝聯などがあり、ある意味では文人士大夫のたちの専門である。宋代以後次第に商業施設にも用いられるようになり、中国商業文学の空前の繁栄時代に、楹聯というこの昔ながらの文学形式は、旅行業・商工業と密接に結びついて、これまで無かった青春の活力をきらめかせたのである。

2、商人・商戦が新時期商業文学の内容の主旋律となった。商業経済が日ましに発展するにしたがって、競争も益々激しさを加え、日ましに経済との関係を密接にしていた商業文学には疑いなく時代の烙印が押されており、多くの作品が商戦に題材をとり、商人を主人公として細やかに描き出している。作品の中にはより一層明らかに理想的な商業精神を打ち立てようと呼びかけているものもある。最も影響のある作家は梁鳳儀及び彼女の“財經小説”のシリーズである。香港の複雑に揺れ動く商業界を背景に、自立奮闘する商業会の女傑を主人公として、商業経営管理と財經の知識を悲しみや喜び出会いや別れの中にとけ込ませ、読者は商業戦線の残酷さのため息をつくと共に、人間性の光もまた感じ取るのである。

3、商業文学の創作者の一群は拡大を続け、創作手段も日ましに新しくなっている。なぜならば、商業文学の特にもつ社会的な価値は、益々多くの人々を魅了してその創作群に参加させるからである。この時期の商業文学の創作者には、伝統的な意味での作家以外に、学者もいれば、さらに才能迸る「儒商」もいる。しかも、近年来IT企業のすさまじい発展で、インターネット文学が自然と商工業界のホワイトカラーに好まれるようになっていく。また当然ながら、伝統的な書籍文学もこれに比べて一層商工業に近づき、中国商業文学の発展に新しい活力を注入して、新しい領域を開拓しているのである。

三

私たちが《中国商業文学發展史》を書くその目的は、中国商業文学の發展の歷程を述べ、中国商業文学の名篇佳作を論評し、中国商業文学の変遷の法則を検討して、中国商業文学の進んで行く道を示すことにある。

よって、論述においては、以下の三点をしっかりとまもっている。これらもまた私たちの

撰述の目的だと言って好い。

第一に、中国商業文学の「商」領域の特色を際立たせる。中国商業文学は中国文学の重要な一分野なのであって、特定の角度から中国文学を読み直して見えてくる存在なのである。商業交易活動は社会生活の中で重要な内容であり主要な構成部分なのだ。人々の各種の活動はみな商業交易活動と直接に或いは間接に関係している。社会生活の中で大きな影響を持つ文学が、各種各様な形式で商業交易活動を映し出すのは当然だ。文学研究の重要な任務の一つは文学現象を明らかにし、文学の法則を探ることである。よって、私たちは科学的な実事求是の態度で中国商業文学が中国文学の存在の一つであることを認めると共に、堂々と商業領域という旗幟を掲げて、その研究を進めねばならない。しかも、特色のある研究作業は生命力に富んだものであり、価値を持つものだと我々は堅く信じるのである。

第二に、独立した科学的体系として作り上げることを目指す。論述する時に、我々は中国文学史と中国商業交易史という二つの流れをしっかりと把握して、文学・商業交易・歴史を融合して一体化し、文学を対象とし、商業交易を拠りどころとし、歴史を手がかりとし、各種の学科を相互に重ね合わせ、各種の角度からの多層的な分析論証を行う立体的な思考空間を作り上げ、それによって独立した科学的な体系を形成することに努めた。

第三に、出土資料や新しく興った現象を積極的に紹介する。近年、出土資料の発見が絶えず、中国商業文学の材料が豊かになった。例えば 1985 年湖南沅陵双橋墓から出土した二枚の元代潭州油漆広告の実物は、文は簡潔で味のあるものだ。また長沙窯で出土した器や皿に焼き込まれた唐詩などには、《全唐詩》にもなく、また広告性をも明らかに持っていて、商人がその幕裏で糸を引ていることが分かるものがある。これらの資料を、本書はことごとく吸収し、筋道を立てて整理し、中国商業文学に一層の「厚み」があるようにする。この他に、既に述べたように、IT産業の猛烈な発展により、斬新な文学形式—インターネット文学が出現したが、これは商業交易活動と関係があって、多数の商工世界の人々が仕事の閑に、胸の内をそのまま述べて、感情や知識をキーボードとインターネットを通して描き出そうとしたものにほかならない。《文心雕龍・通變篇》（南朝劉勰撰）では、「文学創作の変化に決まった方法は無いが、やり方としては新しい表現法を斟酌する必要がある」という。我々が《中国商業文学発展史》を書くに当たっては、当然ながらこの「新しい表現法」に注意する事になる。

最後に、本書が歴史的な角度から中国商業文学を論じながら、どうして《中国商業文学

史》と名付けないのかについて、やはり述べておくべきだろう。私たちは、文学史というものが明らかにすべき事は、文学の簡明で具体的な展開の歴史だと考える。中国商業文学史を作るとすると、中国文学史と中国商業交易史の複雑な関係を理論的に明らかにして、その背景の下中国商業文学の発展と継承を浮き彫りにして描き出さねばならない。さらに、功利性を胚胎する商業文学が、芸術上どのような新鮮さを生み出したか、どのようにその他の文学ないしは文化芸術その他の領域から栄養を吸収し、未来の時代にどのような方向に向かっているか、等々をしっかりと指摘する事になる。商業文学史たらんとすれば、商業取引の領域及び文学領域からの保証が必要なのだ。もちろん、かかる書籍を書き上げようとすれば、膨大で複雑な作業が必要だろう。このような要求に本書は遠く及ばない。

以上が我々の目標とするところである。

我々の著作が、読者の方々の理解を得ることをひたすら願っている。